

令和 4 年 9 月 9 日現在

機関番号：32685
 研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)
 研究期間：2017～2021
 課題番号：17H04520
 研究課題名(和文) 写本文化としての日本近世 国際貢献できるUCバークレー校蔵写本目録作成を通じて

研究課題名(英文) The Manuscript Culture of Early-Modern Japan: Creating an Internationally Accessible Catalogue of Japanese-Language Manuscripts at UC Berkeley

研究代表者
 勝又 基 (Katsumata, Motoi)
 明星大学・人文学部・教授

研究者番号：00409533

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：米国UCバークレー校に所蔵される旧三井文庫の写本約3,500点が本プロジェクトの研究対象である。期間中に計30日の現地調査を行い、日本では、このデータを整理するグループ作業を地道に行ってきた。これにより、データ整備は全体の8割方完了した。
 一方で、2018年9月にはアメリカ日本文学会の年次学会で、英語のパネル発表を行った。また2022年1月にはオンライン・ワークショップ「写本の山は招くよ」を開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

海外での現地調査をもとに近日公開予定の旧三井文庫写本データベースは、書物研究において脚光を浴びつつある「出版時代の写本」について考える上で、これまでにない大きな資料を提供することになるはずである。また、海外で行ったパネル発表およびオンライン・ワークショップは、その意義について新たな価値を提示するとともに、日本のみならず世界の写本学と接続することを可能にした。また、海外所蔵の日本古典籍について英語で学会発表を行ったことは、本科研の分類である「海外学術調査」の趣旨に沿ったものであったはずである。

研究成果の概要(英文)：UC Berkeley C.V. Starr East Asian library has 3,500 titles of Japanese old manuscripts. our goal is to build an online database of that.
 We made trips to US for 30 days and have investigated the manuscripts. Based on the data, we have been forming online database. It is almost done.
 On the other hand, we formed a panel presentation at a conference in US and made an online workshop.

研究分野：日本文化

キーワード：日本近世文化 海外学術交流 書物文化 写本

1. 研究開始当初の背景

これまでに申請者は、全国の藩に収蔵される孝子伝を調査して来た。そこで気づかされたのが、江戸の写本文化の豊かさである。近世の和歌も引き続き写本が中心であり、実録体小説のような、写本だけで流通する文学も生まれた。江戸時代は従来、浮世絵や江戸戯作など、出版文化の時代と考えられてきた。だが実は、写本文化がまだ残っていたのではないか。いやむしろ江戸は、木版印刷の存在をきっかけにして、写本が一層多様にきらめいた時代だったのではないだろうか。

江戸の写本に注目した先行研究には、『日本文学』(2014年)の小特集「出版時代の写本」がある。しかし文学だけに注目しており、残念ながら視野が狭い。既存の分野を越え、幅広く写本を見渡す作業こそが今必要とされている。

その点、江戸の写本ばかりが2,800点集まる(実際には3,500点あった)米国カリフォルニア州のUCバークレー校所蔵の旧三井文庫は、今こそ注目すべき存在である。文学のみならず、歴史・諸芸・宗教など、多彩な写本を有するこの文庫の全点を調査することは、そのまま江戸時代の写本文化の全体像を明らかにすることになるからである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、出版の時代である江戸時代における写本の価値、写本文化の豊かさを明らかにし、国内外に訴えることである。

3. 研究の方法

「写本文化としての日本近世」という新たな価値を創出し、世界に発信するという目的のもと、具体的には、3種類の完成形を世に示す。

3-1: 『UCバークレー校旧三井文庫蔵写本目録』で江戸時代の写本文化の全体像を世界に示す

同文庫の2,800点の全点目録を作成する。このことで、同文庫の全貌を明らかにするとともに、江戸時代の多様な写本文化の全体像をも明らかにする。

写本のみを扱った古典籍目録というのは、従来ほとんど例がない。そのため、成立年代と書写年代を併記するなど、独自の工夫をこらす。

また、従来の海外所蔵日本古典籍目録は、外国人の学生や研究者への配慮がほとんど成されていなかった。本目録では、書名、人名のほか、年代表記や書誌学用語にも英語表記を配慮する。

3-2: 海外の学会でパネル発表「写本文化としての日本近世」開催

本研究は、この問題を国内だけに閉じ込めるつもりはない。世界の「manuscript studies (写本学)」の中における日本の写本の位置付けを試みる。また、出版が確立して以降の写本の位置付けについて、世界的な再考を促すよう問題提起を行う。

さいわい2018年10月には、AJLS(米国日本文学会)がUCバークレー校で開催される予定である。米国・ヨーロッパの研究者が多く集まるこの場で、本プロジェクトのメンバーを中心にパネル発表「写本文化としての日本近世」を行う。

3-3: 「写本文化としての日本近世」研究会発足とシンポジウム開催

多様なジャンルに及ぶ近世写本は、一人の力では網羅できない。よって、文学、美術、歴史、諸芸など、さまざまなジャンルの知を結集し、論文集の形で世に問うことが求められる。このために「写本文化としての日本近世」研究会を期間限定で発足するとともに、書物に関する国際シンポジウムを開催し、多ジャンルの知を結集する場を設ける。

4．研究成果

4-1：現地調査

2020年春から現在まで続くコロナ禍は、海外学术交流を軸とする本プロジェクトには大きな影響を与えて来た。見通しは決して明るくは無いものの、幸いこれまでのところその影響はある程度抑制できている、と言って良いだろう。というのは、写本の現地調査をコロナ前に一通り済ませてしまったからである。

本プロジェクトは、2016年冬から2019年夏までの間に、計40日にわたる現地調査を行い、旧三井文庫だけでなく新規収蔵写本も加えた約3,500点の現物調査を終えた。3,500点を40日で、というのは荒技だが、図書館のサポートとデジタルの活用によるところが大きい。本プロジェクトは館からデジタル画像をメモ的に撮る許可を頂いていた。そのため現地調査にあたっては、現物を見なければ分からないことの確認に集中し、序跋や識語の詳細な検討などといった時間のかかる作業は、日本へ持ち帰ることができたのである。

4-2：口頭発表のアウトプット

調査の一方で、書物に関する国際シンポジウムをこれまで3度開催した。2016年1月には三菱の予算で「写本がつなく日本と世界」を開催した。副題を「古典籍と目録・研究の国際化」と題した通り、海外の司書、研究者を招いて古典籍の国際化について話していただいた。2017年1月には明星大学の予算で「世界の写本、日本の写本」を開催した。ここでは、日本古典籍、漢籍、西洋古典籍における写本の役割について情報交換した。2018年1月には科学研究費の支援によって「写本がひらく江戸へのトビラ」を開催し、江戸文化における写本の役割について議論した。

加えて、科研期間中の2018年9月6日には、UCバークレー校を開催校として行われたAJLS (Association for Japanese Literary Studies、アメリカ日本文学会)の年次学会において、“Sparkling Manuscripts, Sparkling Evidence: The Role of Manuscripts in the Edo Period(きらめく写本、きらめく証拠-江戸時代における写本の役割)”と題するパネル発表を行った。パネリストは、勝又と、現地調査に何度も同行して下さっている慶應義塾大学斯道文庫の佐々木孝浩氏、そしてUCバークレー校で江戸文学を講じるジョナサン・ズウィッカー氏の3名。パネリストはブランダイス大学のマシュー・フレイリ氏にお願いした。勝又は『凶刀伝』(整理番号280)、佐々木氏は『清少納言枕双帟抜書』(整理番号1640)と、共に旧三井文庫の写本を用いて、それぞれに江戸の写本文化の持つ側面を明らかにした。

そして、「はじめに」でも触れた通り、2022年1月10日にオンラインの公開ワークショップ「写本の山は招くよ」を開催した。プログラムは下記の通りである。

第1部 活動報告

勝又基(明星大学)「旧三井文庫調査における3つの工夫と今後」

松本智子(明治学院歴史資料館特任研究員)「難読蔵書印の解読について」

第2部 旧三井文庫からの資料報告

亀井森(鹿児島大学)「境界との接触 最後の琉球使節」

勝又基（明星大学）「皆川良礎とは誰か」

4 - 3 : データベース作成

すでに本研究チームは、2016～19年にかけて、計40日の現地調査を行った。これを通じてデータを採取するとともに、多くの書籍写真を撮影して持ち帰った。また日本では、このデータを整理するグループ作業を年30日のペースで地道に行ってきた。

これによって、データ整備は全体の8割方完了しており、現在残されている具体的な作業は、書誌事項の再確認と、英語対応のみとなった。

このデータをもとにして、オンライン・データベースのプロトタイプを作成した（右下画像）。これは科研時代のアルバイト学生（既卒）に作ってもらったものである。2022年1月10日に開催したオンライン・ワークショップ「写本の山は招くよ」では、このデータベースを実際に稼働して見せた。

データベース公開へのあと一押しに向けて、目下調整中である。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 勝又 基	4. 巻 N/A
2. 論文標題 都市文化としての写本怪談	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 怪異を読む・書く	6. 最初と最後の頁 263-276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勝又 基	4. 巻 30
2. 論文標題 写本文化としての日本近世：公開ワークショップ「写本の山は招くよ」報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明星大学研究紀要. 人文学部・日本文化学科	6. 最初と最後の頁 136-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 勝又基
2. 発表標題 皆川良礎とは何者か
3. 学会等名 公開ワークショップ「写本の山は招くよ」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 亀井森
2. 発表標題 境界との接触 最後の琉球使節
3. 学会等名 公開ワークショップ「写本の山は招くよ」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本智子
2. 発表標題 難読蔵書印の解読について
3. 学会等名 公開ワークショップ「写本の山は招くよ」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 勝又基
2. 発表標題 旧三井文庫調査における3つの工夫と今後
3. 学会等名 公開ワークショップ「写本の山は招くよ」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 勝又 基
2. 発表標題 The Story of a Crazy Katana: The Relation Between Fact and Gossip in the Edo Manuscripts
3. 学会等名 27th Annual Meeting of the Association of Japanese Literary Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐々木 孝浩
2. 発表標題 The Makura no soshi Abridged Version from the UC Berkeley East Asian Library
3. 学会等名 27th Annual Meeting of the Association of Japanese Literary Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 勝又基
2. 発表標題 都市文化としての写本怪談
3. 学会等名 国際シンポジウム「写本がひらく江戸へのトビラ」
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	青山 英正 (aoyama hidemasa) (10513814)	明星大学・人文学部・教授 (32685)	
研究分担者	佐々木 孝浩 (sasaki takahiro) (20225874)	慶應義塾大学・斯道文庫(三田)・教授 (32612)	
研究分担者	佐藤 温 (sato atsushi) (30609152)	日本大学・経済学部・講師 (32665)	
研究分担者	亀井 森 (kamei shin) (40509816)	鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授 (17701)	
研究分担者	川平 敏文 (kawahira toshifumi) (60336972)	九州大学・人文科学研究院・准教授 (17102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	山本 嘉孝 (yamamoto yoshitaka) (40783626)	大阪大学・文学研究科・講師 (14401)	2018年度をもって研究分担者から外れた。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 国際シンポジウム「写本がひらく江戸へのトビラ」	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 公開ワークショップ「写本の山は招くよ」	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関